

インドライオンにおける腎不全の症例報告

小野 香織

(横浜市立野毛山動物園)

飼育していたインドライオンについて、生前の血液検査の記録と臨床症状の経過について報告する。

当該個体は 2008 年 2 月 11 日生まれのインドライオンのオスで、2014 年 6 月 16 日より野毛山動物園で飼育していた。2015 年 11 月よりハズバンダリートレーニングにて採血が可能となり、以降概ね月 1 回を目安に採血し、血液検査を行っていた。2024 年 6 月 30 日に死亡するまでの総採血回数は 8 年半で 76 回に及んだ。

ネコ科動物は加齢により腎不全になることが多いため、今回の発表では腎機能の評価に用いられる BUN, CRE, IP, FGF23, SDMA の 5 項目についての経過を報告する。いずれの値も腎機能が低下すると上昇するとされ、それぞれの評価には一長一短がある。BUN は腎不全以外の影響を受けやすく、腎機能の評価には CRE の方が信頼性が高いとされているが、CRE は腎臓の機能がかなり障害されないと数値の上昇が見られない。今回の結果では BUN は時間の経過とともに緩やかな上昇傾向を示し、CRE が明らかな上昇を示したのは死亡前の臨床症状が表れてからだった。IP は CRE に似た動態を示した。FGF23 と SDMA は初期には測定しておらず、死亡前 2 年余りの間に 10 数回測定したのみであるが、今回の症例において SDMA はあまり数値の変動がなく、腎機能の評価につながらなかった。FGF23 は CRE や IP 同様に死亡直前に急上昇した。

獣医的処置としては 2023 年 6 月より球形吸着炭を与えた。臨床症状としては死亡の 2 か月以上前から食欲の減退が見られ、次第に吐き戻しが見られるようになり、死亡 10 日前に採食した後食欲廃絶となり死亡した。リン吸着剤等の投薬を試みたが、食欲がないためほぼ投与できず、また餌に対する反応が薄くなるため採血自体が困難となるのが課題となった。腎不全自体を治療することはできないため、予後について園内で検討を行い、QOL が保てなくなった場合に備えた。